
白い幻想の時 - Phantom Ashes -

枯らし鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い幻想の時 - Phantom Ashes -

【Zマーク】

Z0608Q

【作者名】

枯らし鴉

【あらすじ】

世界に飽きていた少年は、独りぼっちの少女と出合う。少女は言う「飽きたなら、次の舞台に進んでみない?」と。少年は答えた「連れてつてくれるなら、いいよ」と。だが、少年は知らない。彼女が何者であるか、という事を。

白川由香（前書き）

はじめまして、枯らし鴉です。

さて、早速ですがこの作品が良い作品になるかどうかは皆様の評価にかかりています。

悪い評価でも関係なく指摘してください。それを元に自分も作品を見直して、腕を上げていきたいです。

でも、たまにはいい評価もくださいね？

じゃないと、自分へタレなもので心が折れちゃいます……

では評価、感想待ってます。

あとがきつて邪魔だよね……？

人である事に疑問を持った事はないか。

自分を根底から変えてみたいと思った事はないか。

刺激のないつまらない日常から抜け出したいと思った事はないか。

そして、そんな日常をぶち壊すような運命的出会いとは、いつも何の前触れもなく突然やつてくる物だ……

僕の場合が、まさにそつだつた

十 十

僕が彼女と初めて出会ったのは、毎日毎日より良い高校に入るために夜遅くまで塾で勉強していた、中学三年の冬の暗い闇夜の田の事だ。

「クスクス……キミ、見た目はどこにでもいるつまらない人間達と変わらないのに、中身は随分と変わってるね?」

変わり映えしない日常に心底呆れ、家にも帰らず街の風景に埋もれた小さな公園のベンチで微かに見える星をボーッと眺めていた僕は、上から下まで真っ白なエプロンドレスを着込んだ少女に突然、僕の顔を覗き込むようにそう話しかけられた。

「ん、どうかしたの? ずいぶんと驚いた顔してるよ?」

腰まで伸びた白くて艶のある髪、汚い物など何一つ知らないよう

な澄んだ琥珀色の瞳、そして不思議な魅力を持つ勝ち気な表情。

そんな少女が僕の目の前で、面白そうに笑っていた。見た目、僕よりも少しだけ上のようと思える。

「…………お前、いつからそこにいたんだ?」

僕はこの時、物凄く驚いた。僕がこんな時間に公園に来たのは誰の顔も見たくもなく、少しばかり一人になりたかったからだ。

だから公園に入る時はもちろん辺りに誰もいないのを確認したし、

それに誰かが近くを通り、辺りにも気を使っていたつもりだ。

それなのに、だ。僕は彼女が話し掛けてきたその時まで、彼女の存在に気付く事さえ出来なかつた。

「ふふふ、さあ？ いつからだろうね？」

「…………」

僕には彼女が声と同時にいきなりそこに現れたように思えた。まるで瞬間移動でもして来たかのように……

「まあ、私の事なんて今はどうでもいいよ。それよりも今はキミよ。私はキミに興味があるの」

彼女はベンチに座つた僕の膝に両手をついて、ずいっと僕の顔に自分の顔を近づけた。それこそ、あと少しでお互いの鼻先が触れ合つてしまつ程……

「な、何なんだお前は…………？」

綺麗だ、この時素直に僕はそう思つた。そして、あまりに近づぎる彼女の顔に動悸が速くなる。

「だから、私の事はいひつて言つてるのに…………」

彼女が僕の言葉に少しばかり呆れたようにため息をつく。彼女の吐息が僕の顔にかかるた。

「まあいいわ、特別に教えてあげる。私はレミナ……そうね、私の事を“純白の魔姫”って呼ぶ人もいるけど私は好きじゃないんだよね」
彼女が自分の事について語つたのは、その彼女の名前だけ。
その時はまだそれ以上の事を彼女は語ろうとはしなかつた。

「さあ、次はキミの番よ。キミの事を私に教えて？」

僕はこれ以上質問する事を諦め、次の事について思いを巡らした。はたして、彼女に僕の事について語つてしまつてもいいのだろうか？

僕の頭は、今だ止まる事のない胸の高鳴りとは別に酷く冷静だつた。彼女を認識した瞬間から僕の中で鳴り響いていた警報のお陰で

彼女は何かが違う。

普通ではなく“異常”だ、気をつけろ

だいたいよく考えてみれば、こんな深夜近い時間にこんな少女が一人で出歩いている時点で普通ではないだろう。それに会った事も見た事もないはずの僕に、いきなりそんな事を聞く理由もまるで分からぬ。

そうやつて、僕がいつまでも口を開く事もなく彼女の事を謝しんでいると、彼女は目を細めて再び口を開いた。

「ふうん、やっぱりキミって面白いね。普通ならとっくに私の“歪き”で理性なんか消し飛んでるのに、キミはまだそうやって私を疑うだけの理性を保ってる。でも、これならどう?」

彼女の言葉の意味はよく分からなかつた。だが、その時たしかに辺りの雰囲気が変化したのを僕は感じ取つた。

「三つだけ、私の質問に三つだけ答えて。今はそれだけで十分だから

それは教会やお寺のような神聖な場所特有の張り詰めた冷たい空氣、だがそれにどこか俗な甘くどろりとした感じの物が混ざり合つた形容しがい不思議な雰囲気だ。それが彼女を中心に辺りに渦巻き、僕の中の何かに絡みつく。正直、かなり気持ち悪い……

今すぐにでもここから逃げ出した方がいい、脇目も振らずに逃げ出せと頭の中で警報が最大音量で鳴り響く。

「最初は名前、親から貰つたキミの大切な身体の名前を教えて」

だけど僕の身体は金縛りにあつたように動かない。自分の身体の異変に恐怖を覚えた僕は、心中で必死に絶対に何も喋るまいと決意する。

だが

「霧綜境都だ」

気が付けば僕は、僕の意志とは関係なくあつさりと自分の名前を吐露していた。すでに、僕の身体の支配権は彼女に握られてしまつ

ていた。

「ふうん、境都……いい名前じやない。じゃあ境都、次は真名よ。
身体の名ではなく、魂の銘を教えて」

今度の質問は本当に意味が分からぬ。真名？ 魂の銘？ そんな物を突然聞かれて即答できる人間など恐らくいだろう。いや、仮に考える時間があつたとしてもまともな答えを返す事などできないだろう。

「そ、そんな物は僕にはない……！」

僕は気力の振り絞つて彼女に抗議すると、彼女は少しばかり驚いたように表情を変えた。

「うわっ！？ その状態でまだ理性を保つてゐるなんて、境都つてやっぱり精神の抵抗能力が高いのね。あと一つだけ教えてあげるけど、真名つて言う物はこの世に生きる物なら誰もが持つてゐるのよ。境都、キミは忘れてしまつているだけ……」

彼女が、おもむろに僕の鼻先に人差し指を突き出す。その指の先端では、なにやら真っ白い光が蠟燭の燭のよつに灯つてゐた。

「お、おい！？ 一体、何するつもりだよ……！？」

「真名を思い出すためのお手伝いよ。ほらつ！」「

「いつ！？」

彼女がその白い光の灯つた指先で軽く僕の額を小突いた。その次の瞬間、僕の中に衝撃が走つた。

それはまるで“心”という名の泉に、石を思いつきり投げ入れたかのような衝撃。そしてその時、確かに僕の中の奥底で何かが揺らいだ。

「…………朽ち果てぬ永遠の灰燼。紅き血を劫火に焼かれ、在るべき形を失つた灰の亡骸」

「…………口が勝手に動く。その搖らぎは僕の中で言葉に変換され、意識する事なく僕の口から紡がれる。

「そう、それは境都の魂が形成されてから脈々と受け継いできた魂の系譜。そして、その一番最後に連なる言葉……」

言葉を紡ぐ僕を、彼女が嬉しそうに眺める。

「それが、それこそが真名。魂の根底を形成するための最重要パー

ツ」

「魂の銘は、
“エターナル・グレー終焉の白”」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0608q/>

白い幻想の時 - Phantom Ashes -

2011年1月9日19時25分発行